

令和 8 年度 宮城県 英語教育改善プラン

目標

外国語教育の学習過程に着目させ、言語活動の質を高める授業改善を推進することで、児童が「楽しい」「できる」を実感する授業の実現につなげ、児童の英語力向上を図る。

☒ 言語活動
 ☒ 指導と評価の一体化
 ☒ 教師の英語力・指導力
 ☐ 校種間連携
 ☒ ALTの参画
 ☒ ICTの活用
 ☐ AIの活用
 ☐ その他

(パフォーマンス含む)

(専科教員含む)

(AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

①児童の意識の変容が見られる。
「英語の勉強は好きだ」
R5:66.9%⇒R6:67.2%
「英語の勉強は大切だ」
R5:88.4%⇒R6:89.0%
(R6全国学力・学習状況調査)

②パフォーマンステストを実施している割合が増加
R5 94.8%⇒R7 97.7%
(R5英語教育実施状況調査
R7県教育課程の実施状況等調査)

未だ改善が必要な点

①学習内容の理解に自信のない児童が3割弱存在する。
「英語の授業の内容はよく分かる」77.3%
(R6全国学力・学習状況調査)

②授業中50%以上の時間、児童の英語による言語活動を行っている学校の割合が、100%に満たない。
R5:93.3%⇒R7:93.8%
(R5英語教育実施状況調査
R7県教育課程の実施状況等調査)

2. 要因分析

①研修や学校訪問において「言語活動を通して指導すること」を重点にしたことで、多くの学校において言語活動の実践が充実し、児童の英語学習に対する意欲や意識の向上につながったと考えられる。

②外国語専科教員の悉皆での研修会において、パフォーマンステストの実践を持ち寄り、評価基準や評価方法等を協議したことで、理解が深まり、実施状況が改善されたと思われる。

①理解を定着させるための振り返りや、児童が「できた」を実感できる個へのフィードバックが不足していると考えられる。

②授業中に言語活動の時間を確保しようとする意識は定着している。しかし、実際には活動前の説明やリピート練習、言語活動の準備等に時間を費やす傾向があり、児童が英語を使う時間が不足していることが、伸び悩みの一因と考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

「みやぎの英語教育推進委員会(AIM-C)」において推進計画を策定
(参考URL: <https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/koukyou/kyo-eigo.html>)

①①②学校訪問による伴走支援

教育事務所ごとに指導主事が授業参観し、指導助言を行う。単元構想から授業づくりに関わり、伴走しながら教員の授業改善を図る。

①②②課題を明確にした研修会の実施

小学校英語専科教員を対象とした外国語指導力向上研修会（年2回悉皆）を実施し、「外国語教育の学習過程」に着目させ、特に言語面、内容面で児童自らの学習のまとめと振り返りについての理解を深める。

①①ALTの参画とICTの活用

県ALT-PAによるALTとの効果的なTTについての動画や評価等におけるICT活用の実践事例を、オンデマンド研修やEnglish Salon（教師の勉強会）、県HP等で広く周知する。

②②小学校英語専科指導に係る加配定数の活用

県として教科担任（英語）73名、非常勤講師（英語）4名を加配定数として定めている。また、新規採用については中学校又は高等学校の英語の教員免許を持った受験者を「一定の英語力を有する者」として定義し、令和8年度は新規採用者183人のうち17人（全体の9.3%）が該当する。

令和 8 年度 宮城県 英語教育改善プラン

目標

外国語教育の学習過程に着目させ、指導と評価の一体化を推進することで、生徒が「できる」「分かる」を実感する授業の実現につなげ、生徒の英語力向上を図る。

○CEFR A1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合 (R7 : 44.1% ⇒ R8 : 50.0%)

☒ 言語活動
 ☒ 指導と評価の一体化
 ☒ 教師の英語力・指導力
 ☐ 校種間連携
 ☒ ALTの参画
 ☒ ICTの活用
 ☐ AIの活用
 ☐ その他
 (パフォーマンステスト含む) (AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

- ①授業中50%以上の時間、生徒の英語による言語活動を行っている学校の割合が上昇
R5:62.5%⇒R7:93.7%
- ②授業中の発話の50%以上を英語で行った学校の割合が上昇
R5:48.8%⇒R7:84.9%
(R5英語教育実施状況調査
R7県教育課程の実施状況等調査)
- ③CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合が上昇(英語教育実施状況調査)
R6:36.5%⇒R7:48.1%
- ④英検IBAの平均スコアが上昇
R6:588.4⇒R7:602.1

未だ改善が必要な点

- ①CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合が県の目標値50%に届かない。
R6:44.9%⇒R7:44.1%
- ②パフォーマンステストを実施している割合が減少
R5 85.8%⇒R7 81.0%
(R5英語教育実施状況調査
R7県教育課程の実施状況等調査)
- ③英検IBAの読解の正答率が全テスト(A～F)において、他の領域より正答率が低く、読むことに課題がある。
(R7英検IBA【聞く・読む】)

2. 要因分析

- ①研修や学校訪問において「言語活動を通して指導すること」を重点としたことで、授業スタイルの転換が定着した。
- ②研修等において教師が英語で授業を行うことと生徒の英語力に相関があることを学び、授業改善が図られた。
- ③外部試験受検の奨励、「教師の英語力・指導力の向上のための実践的オンライン研修」伝講により、教員自身の学が意欲が向上した。
- ④教師の授業改善が図られたことで生徒の聞くことの力の向上につながった。

- ①パフォーマンステスト等の評価が「できないところ」を探す減点法に偏り、生徒の「できる(A1レベル)」を正當に評価できていない可能性がある。
- ②スピーキングとライティングのパフォーマンステストの実施方法や評価における理解が不十分で、実施に不安を感じていると考えられる。
- ③授業内で読むことの活動は行われているが、家庭学習等での自律的な「読み」の習慣が定着しておらず、長文読解や語彙定着に必要な「多読・多聴」が不足している。

3. 目標を達成するための施策・事業

「みやぎの英語教育推進委員会(AIM-C)」において推進計画を策定

①②④①②学校訪問による伴走支援

教育事務所ごとに指導主事が授業参観し、指導助言を行う。単元構想から授業づくりに関わり、伴走しながら教員の授業改善を図る。

①②③①②課題を明確にした研修会の実施

中学校英語教員を対象とした外国語指導力向上研修会(年2回悉皆)を実施し、全国学力・学習状況調査や英検IBAの分析結果を教師にフィードバックし、課題を共有する。課題に対する改善策を提案するとともにパフォーマンステストにおいて「CAN-DOリスト」を活用し、加点法による評価やルーブリックの改善等、評価方法の見直しを図る。

②②③ALTの参画とICTの活用

県ALT-PAによるALTとの効果的なTTについての動画や評価等におけるICT活用の実践事例を、オンデマンド研修やEnglish Salon(教師の勉強会)、県HP等で広く周知する。

④③英検IBAを活用した実態把握

全県中学2年生を対象に英検IBAを実施。生徒の英語学習の動機づけを図るとともに、各校の生徒の英語力を客観的に把握し授業改善に生かす。

④③ 自立した学習者の育成に向けた生徒支援

『Miyagi English Library』の活用

県教委で作成した自主学習教材を、生徒自ら家庭学習等で活用できるよう生徒用チラシを配布し、英語学習への動機付けを図る。また、読み物教材(ALT Journal)に音声をつけることで、読むこと、書くことに加え、聞くことの領域も学習できるようにする。

(参考URL: <https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/gikyuu/english-1.html>)

令和 8 年度 宮城県 英語教育改善プラン

外国語教育の学習過程に着目し、指導と評価の一体化を更に推進することで、生徒が「できる」「分かる」を実感する授業を実現し、生徒の英語力向上を図る。

目標

○CEFR A2/B1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合
(R7: A2以上 47.8%、B1以上 20.1% ⇒R8: A2以上 57%、B1以上 27%)

☒ 言語活動 ☒ 指導と評価の一体化 ☒ 教師の英語力・指導力 ☒ 校種間連携 ☐ ALTの参画 ☐ ICTの活用 ☐ AIの活用 ☒ その他
(パフォーマンステスト含む) (AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

未だ改善が必要な点

- ①CEFR C1レベル相当以上を取得している教師の割合増加 (R6:18.2%→R7:23.1%)
- ②小・中・高連携の取組が深まり、県内の学校で共有できる成果物の作成に取り組んでいる。
- ③授業におけるICT機器の活用
の推進
(「発話や発音などの録音・録画」を実施した学校の割合: R7:75%)

- ①生徒の英語力 (CEFR A2/B1レベル相当以上) が目標に達していない。
(A2以上:R7:47.8%)
(B1以上:R7:20.1%)
- ②教師の授業中の英語による発話が少ない。
(R6:32.3%→R7:33.8%)
- ③言語活動を中心に据えた学習過程を改善・充実させるための授業改善の推進

2. 要因分析

- ①各学校 1 名悉皆で英語の発信力を高めるための授業研究ワークショップ研修を年 1 回 (2 日連続) 実施し、教師の学ぶ意欲が高まったと考えられる。
- ②オンライン会議システムを効果的に活用し、異校種間での意見交換や情報共有が活発になってきたと考えられる。
- ③パフォーマンステストでICT機器を効果的に活用する学校が増加したと考えられる。

- ①外部試験を受験する生徒が少ないため、4 技能の英語力を客観的に測定することに学校が苦慮していると考えられる。
- ②授業中の教師と生徒の間でのやりとりが不足していると考ええる。
- ③生徒の英語を言語面・内容面から改善するための教師からのフィードバックが十分機能していないのではないかと考える。

3. 目標を達成するための施策・事業

- ①①②③Teacher's Empowerment Project (教員研修の充実)
言語活動中心の学習過程をさらに改善・充実させるため、総合教育センターとの連携を密にし、教員研修を実施する。
【研修内容】
 - ・ 教師からのフィードバックに焦点を当て、生徒の学習過程を改善・充実させるための実践的な講義・ワークショップを行う。
 - ・ レベル別のグループ分け (B1 を目指す層・A2 を目指す層) によるマイクロティーチングを研修の中で行う (様々な校種の先生方がグループに入り、協働で課題解決を行えるよう工夫する)。
- ①③英検IBAの活用 (客観的データに基づいた授業改善)
生徒の英語力を客観的に把握して授業改善に生かすため、全県立高校 2 年生が英検IBAを受験する (令和 8 年度は 3 か年計画の 2 年目)。
【生徒】具体的目標設定と学習の自己調整に生かす。
【教師】生徒の力を客観的に把握し、実情と課題を踏まえて授業改善を図る。
【県】本県の英語教育の課題を捉えて教員研修の充実に生かす。
- ②③①②③発信型英語教育拠点校事業(小中高連携の視点からの授業改善)
小・中・高での指導の系統性をより一層高めるため、3 校の拠点校を中心に地域の小・中学校 (研究協力校) との共同研究を行う。各校の取組は公開授業研究会等で広く発信するとともに、県内の学校が活用できる成果物の作成に引き続き取り組む。(参考URL: [発信型英語教育拠点校事業](#))

宮城県教育委員会

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
高等学校	①CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		50	39.6	50	48.9	53	47.8	57		60	
	①CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		20	15.5	20	20.6	23	20.1	27		30	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		50	46.6	55	50.8	60		65		70	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合（％）		50	51.9	55	49.2	60		65		70	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	100	100		100		100		100	
		公表（％）	100	57	100		100		100		100	
		達成状況の把握（％）	100	55.8	100		100		100		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		75	63.1	75	66.7	78	66.5	82		85	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合（％）		50	35.7	50	32.3	55	33.8	60		65	

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
中学校	①CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		50	43.1	50	44.9	50	44.1	50		50	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		100	62.5	80		90		100		100	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合（％）		100	85.8	100		100		100		100	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	96.9	100		100		100		100	
		公表（％）	90	56.6	90		100		100		100	
		達成状況の把握（％）	100	76.7	90		100		100		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		50	39.9	50	36.5	50	48.1	50		50	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合（％）		100	48.8	80		90		100		100	

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
小学校	「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	65.5	80		90		100		100	
		公表（％）	90	37.9	80		90		100		100	
		達成状況の把握（％）	100	53.4	80		90		100		100	